

# 食慾

豊島与志雄

青空文庫



同じ高原でも、沓掛の方は軽井沢より、霧も浅く湿気も少ないので、私の身体にはよいだろうと、そう野口は申しましたが、実際、私もそのように感じました。けれども、私の身体によろしいのと同じ程度に、野口の身体にもよろしいので、私達の間の健康の差は前と同様でした。……おう、うっかり口に出しましたが、健康の差……夫婦の間で、相手の体力や気力と自分の体力や気力とを比較して、そしてはつきり意識しますこと、それがどんなことだかは、実際に経験した人にしか分るものではありません。

おかしな話ですが、家の庭に、毛の深い身体のまるっこい黒犬——熊を小さく可愛くしたような恰好なので、クロと私達は呼ん

でいましたが、それがよく遊びに来ますので、いろんなものを食べさせてやりました。或る時、何もなかったので、野口は自分で鰹節をかい御飯にかけてやりました。恰度鰹節が小さくなつていましたところ、野口はクロに食べさせた後、いつまでも丹念にその鰹節をかき、中身のきれいなところだけにみがきあげておいて、それからその、歯も立たないような堅いのを、犬と戯れながらかじり始めました。奥歯や犬歯でがりがりかんだり、しゃぶつたりして、如何にもおいしそうです。私は縁側にしゃがんで、遠い鈍痛のこもつてゐるような胃部を押えて、彼の様子を眺めていました。彼は鰹節をしゃぶりながら、私の方を振向いて、微笑みかけ、それからふと、その微笑を消して、じつと私の顔を眺めま

した。その眼の中に、憐れみ……氷のように冷い憐憫を、私は読み取りました。

——「そんな、そんなばかなことがあるものか。気のせいだ。」と野口は申します。

けれど、憐憫にも、氷のように冷いものがあることは事実です。とは云え、鯉節の話なんか全くつまらないことかも知れません。

私は身長五尺五分、体重十二貫と少し、そして野口は、身長五尺五寸余、体重十六貫ばかり。この違いは、男と女にしてみれば、まあ仕方ないことかも知れませんが、私の胃腸の持病にしたところで、そう大したものではなく、養生の仕方によつてはなおることもありません。野口もそのつもりで、親切にいたわってく

れます。朝の御飯がおいしく食べられるようになれば、もう病気はなおったも同様だ、とそう申しては、私の朝御飯に注意してくれます。けれども私は、いつからとなく、自分のことよりも、野口のことを目について仕方なくなりました。野口は、朝から何かなまぐさ生臭いものを食べるのが好きです。沓掛に來ましては、魚類が不便なので、牛肉の罐詰や佃煮や、時にはすぐ側の旅館にたのんで鯉こくなどを、朝から食べました。そして、脂のぎらぎら浮いてる味噌汁を、音を立ててすすったり、佃煮で茶漬にした御飯を、くしゃやくしゃかんだりしますのを、そばで見えていますと、その匂いがむかむかと胸にきて、私はもう何にも食べる気がなくなります。いくら眼をそらしてもだめなんです。すると野口は、気の毒

そんな眼付で私を眺めます。やはり、冷い、氷のような憐憫です。その奥に、恐ろしい野性……そんなものを私は感じてはいけなかったのでしょうか。

——「お前は、胃腸も悪いかも知れないが、それより、神経衰弱かも知れないよ。」と野口は申します。

まあなんと、安っぽく、片付けてしまったことでしょう。時々、野口のそばで、私はぞつと、云い知れぬ不安を覚ゆることがあります。ましたが、それは神経衰弱なんかのせいではありません。野口のうちには、何かこう、私を押し潰してしまうようなものがありました。それが何であるか、本体を捉えようとする、私はただ、自分の弱さや脆さを感じただけでした。そして息苦しくなるばか

りでした。けれど、例えば……こんな言葉を使つてよいかどうか分りませんが……例えば、木村さんの側では、私はそんな圧迫を感じないばかりか、却つて楽に息が出来、気持が晴ればれとして、頭の中まではつきりしてくるようでした。木村さんについては、野口は変なことを言つたことがあります。「木村君は、なるほど、才能もあるし、明敏だし、好男子でもあるし、立派な人物かも知れないが、然し、あの香水の匂い……三十男の独身者の香水の匂い、あれだけはいけない……。」その本当の意味が、私にははっきり分りませんでした。というのは、私がぼんやり感じますところでは、男の人で三十年配の独身者は、大抵、何かしらひどく男臭いもので、それを消すために多少香水を使つたとて、いけない



わけはありませんでしょう。或はまた、三十三までも独身でいるのがいけないというのなら、猶更おかしなことでしょう。それにまた、木村さんとしては、過去に失恋されたこともありますし、三十三まで独身でいられても不思議ではありません。また、三十三で独身でいても、ちつとも男臭くなるような人ではありませんから、香水なんかも、他意あつて使つていらるるのではないんでしょう。木村さんて、そういう人なんです。何となく弱々しい、夢の多い、感情のデリケートな方でした。そして子供が嫌いでした。子供を相手にしていると、神経を不自然に使わせられる、と仰言っていました。そして、あたりの別荘には大抵子供連れの人たちばかりでしたし、御自分は一人で旅館に泊つていられたもの

ですから、退屈なさると、よく私達のところへ遊びに来られました。

私は知らず識らず、野口と木村さんとを比較して考えることもありました。そして心易い気持ちから、野口の側で感ずる気詰りなことどもを打明けることもありました。「それは、あなたが、御主人の仕事をよく理解していただけないからではありませんでしょうか。」と木村さんは云いました。おう、男の人って、どうしてこう、仕事仕事……と、そればかりを大事にするんでしょう。第一、野口に、どんな仕事があるのでしよう。私立大学の先生で、歴史や文化や語学の勉強……それも仕事にはちがいませんけれど……この点については、私は、野口に近い考えを持っており

ます。「夫婦の愛は、良人の仕事に対する理解の上に立てなければならぬ」というのは、ばかげた考えだ。時によると、女のなまじつかな理解などは、却って男の仕事を害することさえある。充分に愛を持っていない者だけが、いろいろ愛について理屈をこねるんだ。」そんなことを以前野口が申しました時、私はひどく淋しい気がしましたけれど、やはり、それが本当ではないかと思うようになってきました。愛しないのは愛が足りないのだ、それに違いはありません。とは云え、愛を邪魔する何かがあるような場合があることも、事実です。

外を歩くのが私の身体によいというので、私達は時々あちらこちらへ出かけました。軽井沢方面は前年の夏に知りつくしていま

したので、浅間山を中心に、押出岩の方面や追分の方面へ出かけました。けれど私は余り気が進みませんでした。外を歩いていきました。野口と私との間に共通の話題の少いのが、殊に目立ってきました。景色のことなどは、そういつまでも話せるわけのもではありません。そして私は淋しい気持で帰ってくるのでした。

そういうことに反抗したい気持も、私の心の奥にあつたかも知れません。或る日、木村さんをお誘いして、六里ヶ原へ出かけました時、私はひどく快活な様子になりました。小浅間の肩の峯の茶屋まで自動車で行き、それから歩いて分去の茶屋まで行き、そこで街道をすてて左にはいると、もうすぐに、なだらかな斜面の六里ヶ原です。ごろごろした熔岩と火山灰との荒野で、遠く間を

おいて小さな雑木が少しあり、他は見渡す限り広々と、浅間葡萄に這松ばかりです。その小さな雑木の影で、サンドウイツチをたべ、お茶をのみ、焚火をしたりしました。それからやたらに歩きました。浅間葡萄の熟した実を見つけるのが楽しみでした。火山灰の地面には、ところどころ、思いもかけないところに、大雨の際の水の流れの跡があつて、一間余りも深い溝を拵えています。そこに飛びこむと、なかなか上れないことさえあります。木村さんは、「自由を吾等に」のフランス語の主題歌などを小声で歌いながら、ステッキを打振っていますし、私は頓狂な声を立てて、深い溝の中に落っこつたりしました。ただ野口だけは、いつもの通り落着き払って、そしてずっと後れて、四方の山を眺めながら、

悠々と歩いていました。その姿を見ると、私には、荒野の中につ  
つ立ってる巨人のように思われます。巨人……私のことなんかは  
気にもとめない縁遠い他人……というほどの意味なんです。実際、  
彼は私のことなんかは何とも思っていないかったです。もしかしたら、  
遠くの方で、深い溝の中に一緒に飛びこんだり這いあがったり、  
顔をつき合して浅間葡萄の実を奪いあつたりしてる、私と木村さ  
んとのことを、何とも思っていないかったです。もしかしたら。もし  
も……もしも……私と木村さんが、抱きあつて、唇でも……。  
見ると、木村さんは、皮膚に血の気の浮いた顔をして、子供のよ  
うに純真な眼付をしています。私も子供のようでした。二人は手  
を取りあつても、おんぶしても、抱きあつても……決して不自然

ではなかったでしょう。それを、野口はどうして引止めようともしないのでしょうか。僅かばかりの嫉妬の気持さえ感じないのでしようかしら。私はそんなに無視されてもいいものでしようかしら。……何かえたいの知れない熱いものが、胸の底からこみあげてきて、私は頬がひきつるのを感じながら、つつ立って木村さんを見つめました。木村さんは卒直な驚きの表情で、眼をまるくして、近寄ってきてきました。私はくるりと後ろを向きましたが、とつさに、涙が出てきて困りました。駆け出して、溝の中にとびこんで、涙をふきました。あとは、へんに白々として淋しい気持で、木村さんがやって来ても、口を利く気がしませんでした。「どうかなすったのですか。」「いいえ……。」「そして私は強いて微笑みま

したが、なぜか、蒼白い微笑というような感じが胸にきて、妙に身体が硬ばるのを覚えました。そして浅間葡萄の茂みの上に腰を下し、わざと、煙草を一本もらって、戯れにふかしました。

すぐ後ろの方、見上ぐるばかりに聳えてる浅間山の横手から、大きな夕立雲が盛上っていて、それが太陽をかくし、六里ヶ原は半ば影になって、冷々とした空気が流れていました。が遙か彼方の空は、一杯に日の光を含んで、白根や万座の山々がくつきりと浮出していました。それらの広茫たる景色を眺めていますと、私はひどく心細くなつて、もう木村さんのことなんか頭になく、相変わらず悠々と歩いてくる野口の姿を、力強く感じました。けれどその力強さは、自分の孤独感を益々深めるような性質のものでし



た。夕立雲は、見上げてみると、むくむくとふくれ上つて、今にも凡てのものを蔽いつくそうとしてるがようでした……恰度、数日前のように……。

あの時、私達は家の縁側にいて、夕立雲が空を呑みつくしてゆくのを眺めていました。雲に空がかくれて、向うの小山から谷間へかけて、暗澹とした影がたれこめたかと思えるまに、ぱらぱらと大粒な雨がきて、いきなり、ぴかりと……それはもう光とも響きともつかないものでした。私は室の奥にとんで行きました。するともう、激しい驟雨で、その間をぬって、ごうつとひどい雷です。それでも野口は、縁側で煙草をふかしながら、落着き払っています。いくら危いと云つても、笑っています。やがて一際はげしく、

大地に岩石でも叩きつけるような擾乱が起つて、私はそこにつつ伏してしまいました。暫くして、ほつと我に返り、おずおず顔をあげてみると、野口は私の側にいてくれましたが、やはり、愉快そうに外の雷雨を眺めていました。そして私の方を顧みて、大丈夫だよ、恐いと思えば恐くなるし、痛快だと思えば痛快になるものだよ、と云つて微笑しましたが、その時また、ぴかりときたのが、彼の近眼鏡にぱつと映つて、その後から、不敵な眼付が覗きだしました。……不敵な……おう、それは、彼の側にいてさえも、私の心に孤独な感じを与えるものでした。

——「あんな場合には、誰だつてそういう気持がするものだ。それをくよくよするのは、生活力の欠乏のせいだ。」と野口は申

します。

だけど、そればかりでしょうかしら。野口は私をいたわってはくれませんが、少しも庇ってくれようとはしないように、私には本能的に感じられるのです。六里ヶ原でもそうでした。夕立雲の暗澹たる影のうちに、火山灰の荒野のうちに、ぽつねんとしてる私の方へ、彼は泰然としてやって来ました。微笑して、犬か猫をでも見るような眼付をしていました。「もう遊び疲れたという恰好だね。」それに応じて木村さんが、「ほんとに、奥さんは今日ばかに元気でしたね。」……その言葉が、私を夢想から引出しました。私は思いきって敵意ある眼付を、木村さんに投げつけてやり、冷淡な眼付を、野口に投げつけてやりました。

夕立雲に木村さんはいささか惱えていました。もう迎いの自動車が出来てる時分だということで、分去の茶屋へ引返しました。野口と木村さんとが火山のことを話してる後ろから、私はしつこく黙ってついていきました。やはり雷が恐かったのです。

私の胸の中には、線香花火の火花みたいなもの、ぱっと光ってすぐに消える何かが、いつのまにかはぐくまれていました。それが光ってる瞬間には、私は浮々として、神経の発作にでも駆られてるようで、何を仕出来すか分らない気がしましたし、それが消えてしまうと、気分が沈みきって、深い憂鬱に囚えられるのでした。私はなるべく賑かな処へ、木村さんを誘い出しました。グリーン・ホテルへ屢々行き、軽井沢の方へ幾度も出かけました。ま

た、附近の別荘は、星野温泉を中心に、一区劃をなしていただいたので、音楽会、絵画展覧会、子供のための談話会、仮装余興会、そんなものが催されまして、私はつとめてそれに出てみました。野口は、そういう場所やそういう事柄を軽蔑してるらしく、何等の興味も示しませんでした。木村さんは、快活に面白がったり、打沈んで夢想到に耽ったりしていましたが、そうした気持の晴曇が、私の心に触れてくるが多くなりました。

野口は私たちを置きざりにして、よく一人で出かけることができました。湯川の小さな溪谷を小瀬の方へさかのぼったり、浅間の麓の森林地帯を、あちこち探険したり、軽井沢への山越えの間道を、踏査したりしました。そして、人影も殆んど見られない淋

しい自然の中に、勇敢にはいりこんでゆく彼の姿は、なぜとはなしに、野性の獣という言葉を私に思い出させました。歩き疲れて帰って来ますと、その朗かな、何か混濁したものを払い落してきたような様子に……おう、私は見覚えがあるのです。

東京で、時折、野口が賤しい女に接することがあるらしいのを、私はいつしか感ずるようになっていました。私は病身なせいもあるかも知れませんが、そればかりでなく、野口はあの頑健な身体にも似ず、至って性的欲求に淡泊なのを、私はよく知っております。それなのに、ごく稀にせよ、賤しい女に接するとは、どうしても私の腑に落ちませんでした。然しそれも、はつきりそうだと断定は出来ませんし、ただ一種の勘で感じるだけのことでした。

それとなく探りをいれてみますと、野口は一言で否定してしまうか、または、たまには家庭外の飯を食うのも男にはよからうなどと、冗談にしてしまいます。真実のことは掴めませんでした、それでも、そうした場合、何だか一種異様な匂いが私の胸にくるのでした。へんに快活で朗かで、そして私にはいつもよりやさしく、身内が軽々と澄んでるのに、身体の表皮だけが汚れてる……云わば、変な例えですが、廁から出て来た時のような、そんなものを私は感ずるのです。彼がいくら酒に酔って、夜遅く帰って来ても、私は平気でしたが、一種異様な匂いを感じずる時は、とても嫌で、なさけなくて、姿を消してしまいたいという気がするのとさえありました。それは、人生の美しい夢を踏みにじるもの

ように思われました。……その、異様な匂い、それと恰度同じようなものを、戻つて来た「野性の獣」に私は感ずるのでした。

そうした晩には、彼はきまつて、よく酒を飲み、よく食べました。酒飲みはあつさりしたものが好きだと聞いていましたし、野口もふだんはそうでしたが、然し右のような時に限つて、彼はしつこいものを好みました。鯉や豚の脂肉や鶏の臍物など、見ただけでもむかむかするようなものを、荒噛みでのみこみ、そしてやたらに杯をあげます。胸まで赤くほてり、手の静脈が太く浮出します。そしてぎらぎらした眼を見据えながら、人間の生活と一般動物の生活とを比較して話し、人間だけが起床就寝を太陽と共にしないことだの、人間の皮膚の薄弱と内臓の虚弱とが正比例す



ることだの、それから、理知、神経、感覚、感情……感情のことまでも彼は論ずるのです。……私達の夫婦生活の最初の日から今日に至るまで、一日一日と、彼の感情は平静にそして鈍重になってきたのを、私はよく知っております。そしてこれから先、更になくなってゆくことでしょう。理想から現実へ……それは立派な言葉でしようけれど、また、美しい夢を追払って動物性へ逆行することではありませんでしょうか。

——「お前は自分の感情を自分の食物にしたいのだろう。然し、自分以外のものを消化するだけの丈夫な胃袋を持たなければいけないんだ。」そう野口は皮肉に申します。

私の胃袋は……重苦しい食物をあまり受けず、ともすると軽

く痛みだす、病弱な胃袋ではありますけれど、自分以外のものは消化出来ないほど貧弱なものだったでしょうかしら。いいえ、私はいろんなものがほしかったのです……。ダンスもしたいし、音楽もやりたいし、馬に乗りたいと思ったことさえあります。けれど、浅間山に登って噴火口を覗くようなことは……。それは野口一人に任せておきました。

別荘の人たちが数名で、浅間登山をしました。私にはとても行けそうにありませんでした。遠くから見てる方が美しい、と木村さんも云いました。雄大にそしてゆったりと聳えて、うすく煙を吐いてるその姿は、朝も昼も晩も、いつ見ても美しいものでした。登山は、夜の十二時頃出発して、夜明け前に頂上につき、噴火

口を覗いて、それから日出を見るのだそうです。そして普通は、小諸へおりののが順路ですが、野口の主張で、少し嶮岨だが山道をつたって、血の池を見、追分へ出るとのことでした。「こちらから見えるあの岩の間を、降りてくるんだ。明日見えてごらん、相図を試してみせるから。大丈夫危いことなんかあるものか。たとえあつたところで、手足の皮をすりむくくらいだ……。」

「私だけ、そんな危険のことなどを考えてるのではありませんでした。私は、噴火口に身を投げて死ぬ人たちのこと、その人たちの心の中などを、考えてるのです。もしも私が、この病弱な孤独な……孤独という感じを持つのは、私の方がいけないのでしょうか……その生活を悲しんで、そして……いろんなことがあつて……」

：野口に、一緒に死にましようかと云ったら、野口はどんな顔をす  
るでしょう。自殺者などとは余りにもかけ離れた人種のように、  
その時私は野口のことを感じました。それが私にとっては、どん  
なに淋しいことだったか分かりません。草鞋脚絆に、水筒と弁当と  
を背負った、元気ないでたちの人々をのせて、峯の茶屋まで行く  
自動車が、闇の中に消え去ってゆくのを、私はじつと見送りまし  
た。野口は最後に、散歩にでも行く時のような一寸した笑顔を私  
に見せたきりでした。私の存在なんか、彼にとっては何でもない  
のです。

他の人たちが戻っていった後まで、私はぼんやり立っていました。  
気がついてみると、木村さんも私の側に佇んでいました。そ

して二人で、無言のうちに、私の家の方へ歩き出しました。すぐ近くですが、真暗な木立の中の坂道です。木村さんは私を送ってきてくれるのだ、そして木村さんの旅館の戸は夜通し開いてる、そんなことが分っていました。木村さんの片手の懐中電燈の光が、ちらちらと足もとだけをてらします……。

十二時頃は、山の中では、もう真夜中です。生きてるものの気配もなく、しいんと静まり返っています。木村さんは首垂れて、妙にしよんぼりとした姿で、力のない歩み方でした。ふと何か……気になって、私は立止って、木村さんの顔を見ました。暗くて何にも分らず、声だけが聞えました。「どうしたのか、私は……あの、噴火口で死ぬ人たちのことを、考えていたものですから……

…。「私はぞつとしました。「私も……。」と云いかけて、そして何に堪えられなかったのか、よろけるようになって、あの人の肩にすがりつきました。近々と、薄い闇を通して、あの人の、美しい澄みきった眼が見えました。その時、ふいに、懐中電燈の光が消えて、あとに残ったのは、三十男の独身者の、でも少しも男臭くない、かすかな香水の匂いでした。かすかではあるが……夢……にしては余りに強すぎました。私は一方では齒をぎりぎりかみしめながら、そして一方ではうっとり酔いながら、もう自分で自分の身体を支えきれませんでした……。気が狂ったのでしよるか。それでも、私は前後の処置を狡猾に考え廻して、手落なく事を運びました。女中をねかし、また外に出で、木村さんと夢の

ようなことを語りあいました……。

——「自由に眼がくらんだのだ。」と野口は申します。

けれども、大切なのは、野口が側にいなくなつて、その冷かな憐憫の圧迫がなくなつて、そしてなぜ、私が「自由」を感じたかということですよ。ひとたまりもなく打負けたのは、眼がくらんだのかも知れませんが、然し、なんといいろんな沢山のものを、私は求めていたことでしょう。またいろんな沢山なものを、自分のうちに持っていたことでしょう。その翌日はもう、私と木村さんは、浅間山の方はふり向きもしないで、谷間の奥深くに逃げこんで、昼食もたべずに、人目を避けました……。草の上、河原の小石の上に、やたらに香水をふりまきました。睡眠中よりも、もつと深

い強い夢でした。

その夢からさめると、私はもう何物にも、どんな一寸したことにも、対抗するだけの力がありませんでした。野口が帰ってきて、私はただ白痴のような微笑を浮べてるきりでした。木村さんは、凡てを告白しよう、そして出来ることなら、二人結婚しよう、とまで云いました。ひどく煩悶して寔れていました。とげとげしたところさえ出て来ました。そして一日おいて、後のことを約束して、東京へ帰ってしまいました。私はどんな約束でもしました。意志なんかは……約束を守る意志さえも……少しもありませんでした。そして木村さんが立去ると、私の白痴のような微笑は、とめどもない涙に代りました。泣いても泣いても、涙がつきません



でした。いろいろ問いつめられて、私は野口に一切のことを告白しました。少しも気の籠らない、それでいて涙にぬれた、ばかげた告白でした。けれど、おう、その時、私は野口の、極度の軽蔑の眼付に出逢いました。「僕はお前を自由に放っておくことが、お前の精神力を引立たせる仕方だと思っていた。精神力さえ盛んなになればよいと考えて、じつと眼をつぶっていたのに……。」そう云いながらも、彼の眼には、崇高だとも云えるほどの軽蔑の色が溢れていました。私は心の底まで凍りつく気持がしました。もう駄目だ、私と野口との間は、どんなことをしても凡て駄目だ、ということをはつきり感じました。

——俺はお前たちを軽蔑する。お前たちのような人種は滅びて

しまった方がよい。

野口の眼はそう云っていました。けれど、彼は淋しそうでした。或は彼の方が私よりも大きな夢を持っていたのかも知れませんが、現実的に、何という力強い食慾を持つてることでしょう。私はただ、まとも泣きたくありません。

# 青空文庫情報

底本：「豊島与志雄著作集 第三卷（小説3 [#「3」はローマ数字、1-13-23]）」 未来社

1966（昭和41）年8月10日第1刷発行

初出：「中央公論」

1935（昭和10）年10月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：門田裕志

2008年5月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# 食慾

豊島与志雄

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>